台大日本語文研究第 34 期
2017 年 12 月，頁 129-160
2017-09-30 收稿，2017-11-06 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2017.34.129

在台灣以日語為傳承語言教育團體的現況與課題

服部美貴*

摘要

以日語為傳承語言的教學活動目前在台北、桃園、新竹、台中、台南、高雄等 6 個城市展開。其特色為非營利團體、以日語授課、使用日本小學國中的「國語」課本、全部家長需要參與學校的營運。

從團體學習中，小孩和家長都會得到「夥伴關係」「收集/交換資訊」等收穫，但另一方面「家長對於活動付出太多造成負擔」成為長期以來的最大課題。

本文透過參與該團體的家長們為對象的問卷調查與筆者對該團體所進行的參與觀察，把握其「負擔」本質，並探討由家長自力營運傳承語言教學活動的意義做為研究目的。

依調查結果得知，家長們「負擔」當中很多項目為這樣營運方式的團體不得不擔任的工作內容，也可以說無法避開的。但不可忽略的是，有不少項目是家長之間的溝通不周全，或對於學習內容過於豐富等心理上的因素所帶來的負擔。

為減少家長們所感到的負擔，可以舉辦實際的交流會或研習會，透過實際場面的交流打造跨班級、跨團體溝通的環境。且以研究者的立場來說，需要提供最新傳承語言教學的動向給家長們，以利後續營運順利。

關鍵詞：台灣傳承日語交流網、台北日語授業校、傳承日語

* 台灣大學日本語文學系講師

臺灣大學學術期刊資料庫

Current situation and problem of teaching Japanese as a Heritage Language in Taiwan

Hattori Miki *

Abstract

In Taiwan, there are seven self-conduct groups which teach Japanese as a heritage language (JHL) managed by school children's own parents are in six cities.Through learning in groups, besides improving Japanese proficiency, both children and parent can get a lot, but on the other hand, "working for JHL group is too hard" has been one of the biggest issues for a long time period.

In this paper, it is aimed to clarify what make parents feel hard by conducting questionnaire survey and participant observation, and study the roll of those JHL groups to children and parent.Result shows that most of the works they involved is requisite as long as it is a self-conduct. But what worth considering is that some are due to lacking of communications or excessive expectations by parent for JHL learning. Face-to-face communication and information on current JHL education is needed to lighten their working load.

Keywords: JHL network in Taiwan, Taipei Japanese Supplementary School, Japanese as a Heritage Language (JHL)

* Lecturer, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

台湾における日本語継承活動の現状と課題

服部美貴*

要旨

台湾には日本にルーツを持つ子どもたちを対象とした継承語としての日本語教育活動が台北日本語授業校をはじめ、桃園、新竹、台中、台南、高雄の6都市で保護者の自主運営によって行われている。個人ではなく団体で共に学習することは、保護者にも子どもたちにも「仲間作り」「情報収集・交換」という日本語習得以外の収穫もある一方で、「保護者の負担の大きさ」も、長年の最大の課題となっている。

本稿では、保護者を対象にしたアンケート調査と参与観察によりその「負担」の実体を明らかにすると同時に、こうした活動の意義を探ることを目的とした。

保護者の回答による「負担」の多くは学校のような組織を自分たちで運営していく中では必然的なことではあるが、保護者同士の意思決定の方法や子どもの学習に対する過剰な期待等からくる心理的負担も見逃すことはできない。実際に顔を合わせた交流や研修の場を設け、縦横の意思疎通が潤滑にできる環境を整えていくこと、そして、保護者たちに継承語としての日本語教育の新しい動向を研究者から情報提供していくことも必要だと考える。

キーワード：台湾継承日本語ネットワーク、台北日本語授業校、継承語としての日本語

* 台湾大学日本語文学系講師

臺灣大學學術期刊資料庫

台湾における日本語継承活動の現状と課題

服部美貴

一、はじめに

（一）、継承語としての日本語教育

国際結婚や海外就職・起業の増加に伴い、日本の国外で育つ日本にルーツを持つ子どもが増えている。そうした年少者を対象にした継承語としての日本語教育も盛んになってきている[1]。日本人学校に通っていない児童生徒を対象とした日本語補習授業校（以下、補習校）は、本来数年後に帰国を予定している駐在員家庭の児童生徒を主な対象としており、帰国に備えて日本の国語の授業を中心に授業が行われてきた。近年は、必ずしも数年内に日本に帰ることが決まっているわけではない児童生徒が増えてきている。そうした子どもたちには、従来の補習校のカリキュラムがニーズに合わなくなっている（佐藤・片岡 2008、カルダー2011）。

継承語としての日本語教育カリキュラムがダグラス（2006）、中野（2017）等アメリカでの実践とともに報告されている。これらは多様な文化的言語的背景を持つ子どもたちを対象とするカリキュラムで、言語教育のみならず認知面、感情面、社会性の発達のニーズを満たすプロジェクト遂行型の学習活動である。

アジアでも、深澤（2013）がタイのバンコクで主に日本人保護者により自主的に運営されている日本語継承の活動事例を紹介している。ここでもタスク活動を中心とした、言語面もマルチレベル学習者に対応した活動が保護者たちの手作りによって行われている。韓国でも日本人の母親たちによる小規模の日本語継承活動が行われている（花井 2016）。

台湾では、6 つの都市で保護者の自主運営による継承語としての日本語教育活動が行われている。規模や活動歴の長さは異なるが、

[1] https://sites.google.com/site/keishougo/report

臺灣大學學術期刊資料庫

①授業や学校行事等すべてが保護者の参与のもとに成り立っている、②保護者は子どもの教師と運営すべてにおいて当事者である、③日本の国語の教科書を主な教材として使用している、という 3 つの共通した特徴がある。

世界各地には大小様々な規模で継承語としての日本語教育を行う学校や団体があるが、すべての団体がこうした特徴を持って活動している国は、管見の限りでは台湾のみである。

こうした活動は熱意のある保護者によって始められ支えられているが、リーダー的存在の保護者が子どもの卒業や家族の移動などで活動から抜けると、その先は運営が不安定になるという例は珍しくはない[2]。実際、台湾においてもそうしたことが各地で繰り返されてきた。互いの情報の共有や交換及び交流によって運営基盤を少しでも固め、各地の活動が持続できることを目指して、2011 年 6 月に「台湾継承日本語ネットワーク」が発足した。

（二）、本稿の目的

年少者を対象とした継承語としての日本語教育は、そのカリキュラムや教材の開発が中心的課題となっている[3]。しかし、在籍児童生徒の保護者が教師や運営者としても当事者である台湾では、そうした必要性も感じながらも、実際には日々の授業や行事に追われ活動を続けていくのに精一杯という状況であると言わざるを得ない。

こうした日本語継承活動に参加している保護者たちは、自分たちの手で教育の実践を行いわが子たちの成長に達成感と充実感を感じる一方で、「仕事が大変」「保護者の負担が大きい」という声もあることは否めない。内部ではそれが不満に繋がったり、外部ではその噂が広がり参加希望者が思うように増えなかったりする等、団体の

---

2 韓国でも同様の事例が紹介されている。
https://docs.google.com/viewer?a=v&pid=sites&srcid=ZGVmYXVsdGRvbWFpbnxrZWlzaG91Z298Z3g6MmVmN2RlNTNiZTFiNmI1Zg

3 オランダのアムステルダムでは、多様な文化や言語の背景を持つ子どもたちへの日本語教育活動「てらこや」を展開し、教材「おひさま」も日本のくろしお出版より出版されている。
https://terakoyaamsterdam.wordpress.com/%E3%81%A6%E3%82%89%E3%81%93%E3%82%84%E3%81%AE%E3%81%94%E7%B4%B9%E4%BB%8B/

臺灣大學學術期刊資料庫

存続の危機にも関わることもある。

台湾で最も規模が大きく活動歴も長い台北日本語授業校の設立の経緯と活動状況については服部（2015）に詳述されているが、保護者が主体となっているこの活動が存続していくには、まず当事者である保護者の声に耳を傾けることが肝要である。

そこで筆者は、台湾各地の日本語継承活動に携わる保護者を対象に調査を行った。その結果と台湾継承日本語ネットワークの活動及び台北日本語授業校の活動への参与観察をもとに、保護者たちが口にする「大変」「負担」の実体を探ると同時に、台湾における日本語継承活動の意義について考察することを目的とする。

二、台湾における日本語継承活動

（一）、台湾の国際結婚の傾向

台湾の 2016 年の統計[4]によると、台湾国内の総婚姻数に対する外国籍男性配偶者の割合は 3.4%、外国籍女性配偶者の割合は約 10%となっている。そのうち女性については、中国大陸・香港・マカオ出身者が 60%を占める。外国籍配偶者との婚姻件数と割合は 2003 年をピークに減少しつつあるが、中国・香港・マカオ及び東南アジア出身者の数が減る中で、日本を含むその他の国の女性外国籍配偶者は、件数も割合も増えている。

表 1　台湾での日本人配偶者の主な居住地域

	男性	女性	計	全国に占める割合
1.台北市	555	751	1,306	33.5%
2.新北市	354	378	732	18.8%
3.高雄市	215	153	368	9.4%
4.台中市	173	177	350	9.0%
5.桃園市・縣	141	165	306	7.9%

[4] 中華民國內政部戶政司全球資訊網 http://www.ris.gov.tw/346

臺灣大學學術期刊資料庫

6.新竹市・縣	65	192	257	6.6%
7.台南市	114	88	202	5.2%
その他	184	195	379	9.7%
全国合計	1,801	2,099	3,900	100.00%

2012 年の統計では、中国・香港・マカオを除いた外国籍女性配偶者の出身国別順位は、ベトナム、インドネシア、フィリピン、タイ、カンボジア、そして日本と続く。

台湾在住の日本籍配偶者については、二つの特徴がみられる。

他の国では女性の外国籍配偶者が圧倒的に多いのに対し、日本籍配偶者は男女の数がほぼ 1 対 1 の比率を成している。

もう 1 点は、都市部の居住者の割合が多いことである。台北市とその周りの新北市の居住者は、日本人配偶者全体 3,900 人の半数を越えており、更に台中市、台南市、高雄市を加えた 5 大都市の居住者は、日本籍配偶者総数の 75%に上る。そこに北部の桃園、新竹を合わせると 9 割以上に達する。

（二）、台湾継承日本語ネットワーク

1.概要

前述した日本人配偶者が多く居住している地域を反映するかのように、台湾では台北（周辺の新北、基隆の居住者を含む）、桃園、新竹、台中、台南、高雄の 6 都市において、主に台湾と日本の国際結婚家庭の子どもたちを対象に日本語を継承する活動が行われている。

表 2　台湾継承日本語ネットワークに参加している団体[5]

	台北[6]	桃園	新竹	台中	台南 a	台南 b	高雄
	台北日本語授業校	桃園日本語クラス	新竹日本語習授業校	台中日本語クラス	にほんごスイッチ	こくごクラブ	寺子屋高雄

[5] 2017 年 6 月時点。発足当時は嘉義の団体も参加していたが、3 家族の兄弟姉妹で活動していた中の 1 家族が他都市に移住したため活動を停止した。日本語教育の団体ではないが、「居留問題を考える会」も会議やメーリングリストに参加している。

[6] https://www.tjss.org.tw/

臺灣大學學術期刊資料庫

設立年	2001	2006	2004	2002	2010	2014	2011
在籍者数	92	39	30	25	約 50	7	17
両親の一方日本籍（%）	68 (68%)	32 (82%)	24 (80%)	23 (92%)	約 50 (100%)	7 (100%)	17 (100%)
両親とも日本籍（%）	19 (21%)	5 (13%)	6 (20%)	2 (8%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
日本人学校	有	無	無	有	無	無	有
外国学校	有	無	有	有	無	無	有
運営費[7]	700 元/月	300 元/月	200 元/月	約 420 元/月	200 元/年	200 元/年	150 元/月
備考	日本政府援助対象校				月 1 回遊び中心		

これらの団体[8]は、保護者の無償参与で全てが運営されている非営利団体である。授業やイベントを含む学校運営を保護者自身が担当する。遊びが中心の台南の「にほんごスイッチ」以外は、日本の国語の教科書を主な教材として日本語で行われる授業で読み書きを中心に学習している。運営費は主に教室借用料、教材費、イベント実施経費に充てられている。

台湾各地の団体はそれぞれに自ら立ち上げ活動を行ってきたが、その中で横の繋がりの重要性を感じてできたのが、「台湾継承日本語ネットワーク[9]」である。2011 年の発足以来、年に一度の台北での年次会議の開催、オンラインでの情報や意見の交換の他、合同で勉強会や交流会も不定期で行っている。

2.各地の状況

台湾には台北、台中、高雄の三都市に日本人学校がある。そのため、台北日本語授業校、台中日本語クラス、寺子屋高雄への参加者は、日本人学校は選択しなかったが日本語の読み書きを身につけさせたいという考えのもとで通っている家庭が多い。

---

7 1 元は約 3.7 円（2017 年 9 月時点）

8 本稿中では、保護者たちによる自主活動という形態を明確にするために、「学校」ではなく「団体」という表現を使用する。

9 https://sites.google.com/site/twjhlnetwork/

臺灣大學學術期刊資料庫

一方、新竹は IT 関連企業が多く、駐在員及び現地採用や起業した日本人も多く住んでいるが、現地校か外国学校の選択となるので、日本人学校があれば子どもを入れたいと考えている家庭も新竹には含まれている。

台北、台中、高雄のように日本人居住者が多い都市には、年少者向けに日本語の読み書きを教える日系の学習塾や個人塾等も複数存在しており、ここで学ぶ台湾の学校や外国学校に通う日系児童たちもいる。ここでは基本的に保護者は運営や授業に関わる必要はない。

台北日本語授業校は 2013 年度より日本政府の援助対象校に認定され、教室借用料の約半分の補助を受けている。

南部の台南、高雄の団体の活動歴は北部や中部に比べると長くはないが、2011 年以前の台南では小学校教員経験者の日本人女性が教師となって継承語クラスが開かれていた。しかし、その教師の帰国に伴い閉鎖された。「にほんごスイッチ」は、月に 1 回台南市内の大学のキャンパスに集まり、日本の伝統行事や遊びなどを日本にルーツを持つ親子で楽しむ活動をしている。同じ台南にある「こくごクラブ」は、教科書を使って読み書きを教えたいと考えた 3 家族の保護者たちによって「にほんごスイッチ」から派生した団体である。

3.外部の日本関連団体との関わり

台湾継承日本語ネットワークは、毎年年次会議を台北で開催している。各地の団体の代表をはじめ、居留問題を考える会[10]の役員、台湾日本人会、日本台湾交流協会領事室及び日本語専門家、各地の日本人学校の校長、教頭、教諭等来賓の出席のもと、カリキュラムや運営についての意見交換を行っている。年次会議の開催には、発足当時から台湾日本人会日台交流部会より協賛も得ている。

台湾における日本の在外公館に相当する日本台湾交流協会からは、日本政府からの補助の手続きや日本語専門家の勉強会やネットワー

[10] 台湾各地で座談会の開催、会報の発行を行い、主に国際結婚家庭が台湾で生活する上での法律、教育面でのサポートを行っている。会員は全国に約 400 名。「台湾継承日本語ネットワーク」発足に際しても、同会各地役員の繋がりが大きく貢献した。https://sites.google.com/site/kyorumondai/home

臺灣大學學術期刊資料庫

ク年次会議への出席などの支援を受けている。台湾日本人会からは活動資金や教室契約の仲立ち等密接な関係があることから、台北日本語授業校では保護者に台湾日本人会への入会を義務付けている。

更に、台北日本人学校からは年に 7,8 回同校教員による授業が行われる他、年に 8 回ほど同校の教室を借用している。年度の始めと終わりには保護者との懇談会、北部地区に属する台北、桃園、新竹の保護者たちを対象とした台北日本人学校の授業参観の機会が年に 1 度提供されている。これらの目的は、保護者たち自身がプロの教師に学び、自分が教壇に立つ時に役立たせるためである。

桃園と新竹にも、台北日本人学校の有志の教員が赴いて授業が行われることもある。また、桃園と新竹の児童生徒は、1 年に 1 度台北日本人学校で同校の教員による 2 校の合同授業を受けている。

台中も、台中日本人学校から校舎や学校敷地の使用や教員による授業サポートなどの支援がある。

保護者が主体の活動ではあるが、こうした外部の関係団体の支援も運営の安定に大きく貢献している。

4.使用教材

「にほんごスイッチ」を除く各団体では、主な使用教材として日本の国語の教科書を使用している。前述したように、欧米に限らずアジアでも、継承語としての日本語の教育現場では、国語の教科書を使用しない傾向が強くなってきている。

しかし台湾では、①日本国籍を有する義務教育の学齢期の子どもは申請すると在外公館を通して日本の教科書が受給できる[11]、②夏休み等に日本の学校に一時編入する際に同じ教科書を使っている可能性が高い、③日本人学校でも同じ教科書を使用しているので、同

[11] 日本国籍を有する義務教育の年齢の児童生徒は、在外公館に申請すると同日本の学齢に相当する教科書を受給することができる。しかし、国や地域によっては、日本へ帰国することが明確に決まっている児童生徒のみが受給の対象となっている場合もある。
支給される国語の教科書は光村図書出版のもので、日本国内でのシェアが最も高いと言われており、台湾の日本人学校でも同じ教科書が使用されている。
http://www.asahi.com/business/topics/economy/OSK200908010170.html

臺灣大學學術期刊論文專用

校の教員による授業でも使用できる、④副教材や参考資料を入手しやすい、⑤親が学んだ「国語」の教科書で子どもにも学ばせたい、⑥高学年になって漢字が増えても負担にならない、⑦他に適した教材が見つからない、などの便宜的及び保護者の情緒的理由により、設立以来、国語の教科書が採用されている。ただ、こうした肯定的な理由がある一方で、「他に継承語としての日本語教育に適した教材があれば、使ってみたい」という声もある。

三、調査の概要と結果

（一）アンケート

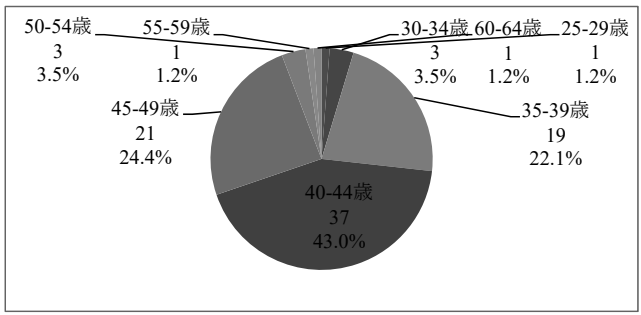
1.アンケートの実施時期と回答者の属性

アンケートは2016年2月に各地の団体の代表を通じて各団体の保護者に協力を依頼し、86名の回答が得られた[12]。

アンケートの回答者は女性79名で男性7名、年齢内訳は40-44歳が43%を占め最も多く、次に45歳-49歳が24%、35-39歳が22%と続く[13]。台湾国籍の女性が5名、残りの81名は日本国籍である。

回答した所属団体別の保護者数を図2に示す。最も多い台北の28名は、台北の保護者数の約半数にあたる。他は在籍者数が少ない高雄以外は13,14名とほぼ同数である。特に各地の団体の運営の中枢に携わる保護者を中心に回答が得られた。

図1　アンケート回答者の年齢別内訳



[12] 依頼の際には、研究の目的とそれへの使用に対する同意を得ている。
[13] 50~54歳の1人、55~59歳の1人はそれぞれ子どもが既にその団体を卒業した現在も運営をサポートしているメンバーである。

臺灣大學學術期刊資料庫

図 2　所属団体別回答者数

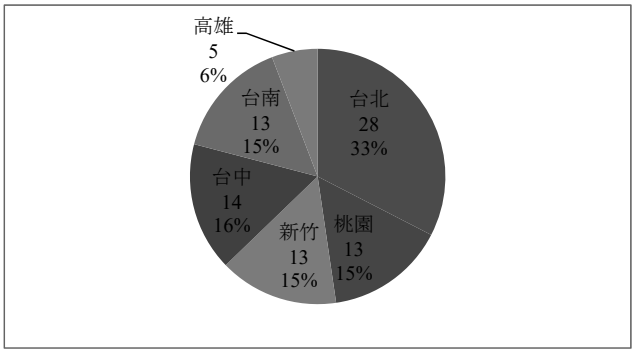
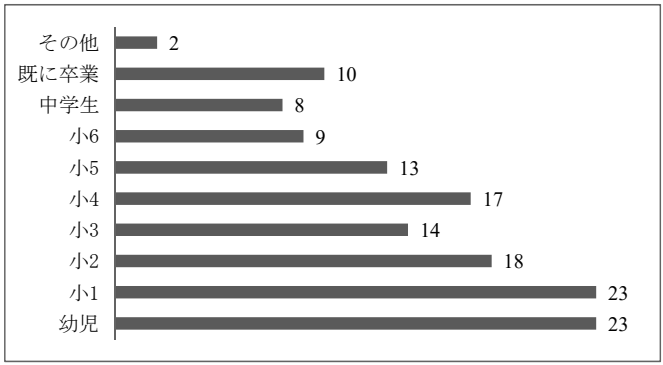


図 3　回答者の所属クラス



所属クラスは調査時点で回答者の子どもが在籍しているクラスについて、子どもの数で回答する。学年別でクラス分けをしていない桃園の一部の保護者の回答は「その他」になっている。

前述したようにネットワーク参加団体の中でも台北日本語授業校は、その規模や活動歴が最大である他に、外部関連団体からの支援も大きく、日本政府の援助対象校になっていることもあり、他の団体と保護者の仕事の内容や複雑さが異なる。以下の回答は、台北を含む台湾全体と台北のみの回答と分けて示すことにする。

回答者の当該団体への在籍期間は図 4-1、図 4-2 である。幼児クラスとや小 1 クラスの人数の多さに比して回答者の在籍期間が長いの

臺灣大學學術期刊資料庫

は、第 2 子や第 3 子等複数の子どもが在籍しているためである。

図 4-1　在籍期間：全体（86 名）

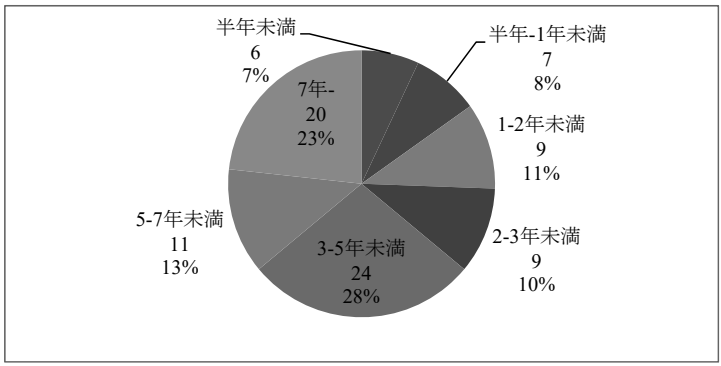
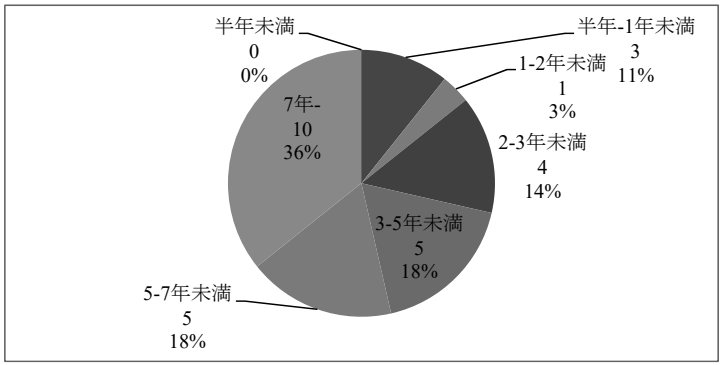


図 4-2　在籍期間：台北（28 名）



2.各質問項目への回答

子どもに日本語を習得させる手段は多々ある中で、保護者の関わりが義務付けられているこれらの団体に参加しているということは、ここで得られる何かがあるからであろう。以下、（1）所属団体の活動が日本語習得以外に役立つこと、(2)所属団体での課題、(3)個人として難しいと感じていること、（4）所属団体の活動をよりよくするために改善できることの 4 つの質問への回答について述べ

臺灣大學學術期刊資料庫

る[14]。

（1）所属団体の活動が日本語習得以外に役立つこと

図 5-1　日本語習得以外に役立つこと：全体（回答者 86 名）

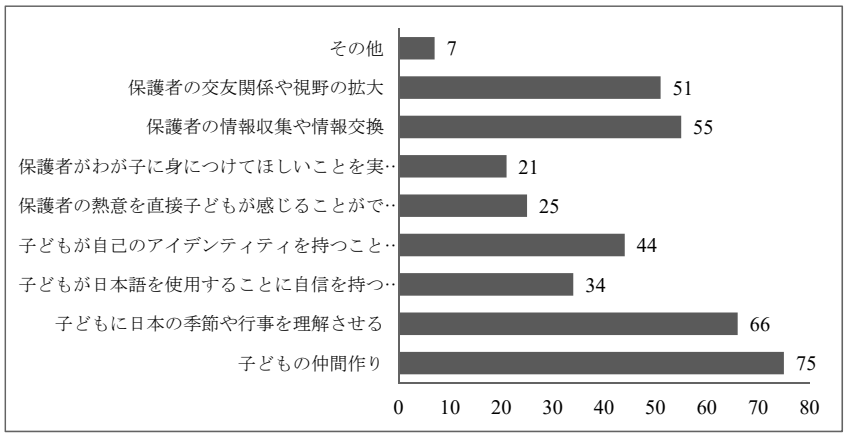
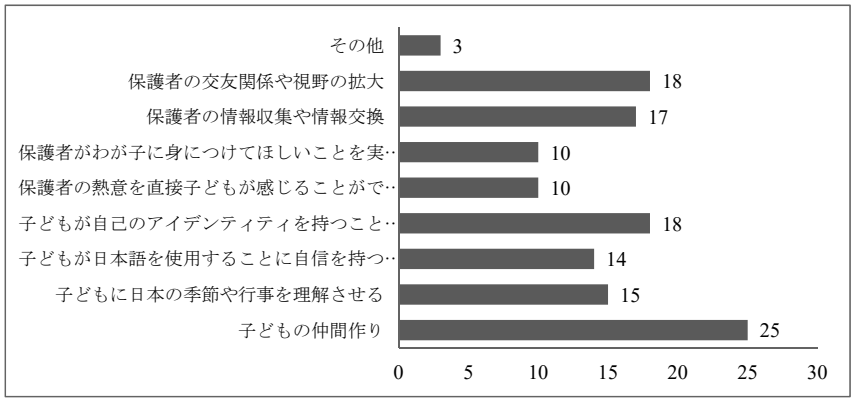


図 5-2　日本語習得以外に役立つこと：台北（回答者 28 名）



この質問は選択肢（複数回答可）と「その他」への自由回答からなる。台湾全体でも台北でも、「子どもの仲間作り」が最も多い。

[14] 他の質問項目については、それらの結果を合わせて提示することで回答者が特定されることを避けるため、本稿では扱わない。

臺灣大學學術期刊資料庫

そうした仲間と長年共に学ぶことが、「子どもが自分のアイデンティティに自信を持つ」や「保護者の交流」にも繋がる。

「子どもに日本の季節や行事を理解させる」が全体では 2 番目に多い。ゲームや歌、工作、料理等を通して季節の行事を経験するのは、団体のほうが盛り上がるからであろう。

「その他」の自由回答には、以下のコメントが寄せられた。【】内は回答者の所属団体の都市名である。（所属団体の北から順に挙げる。太字の強調は筆者による。以下、全てのコメントに同じ。）

a. 台湾の学校には授業参観がないが、授業校では授業中の子どもの学習の様子を見ることができる。【台北】
b. 日本の学校形式の授業を受けることができる（礼儀や姿勢を正しくする等や日本の学校式の発表会等）【台北】
c. 2 ヶ国語以上の学習の大変さを、親子で身をもって実感できる。良くも悪くもいつも二人三脚だと感じる。【台北】
d. 費用が安い。【桃園】
e. 喜び（笑顔）の中で日本語を学ぶことができる。【新竹】
f. 保護者自身が学び成長できる。【台中】
g. 保護者の経験値が上がる。【高雄】

以上の回答及び図 5-1、図 5-2 からも、子どもの日本語習得以外の収穫として、保護者としての利点が多く挙げられている。

（２）所属団体での課題

複数回答可による選択肢の中で、「保護者の仕事の負担」「人数不足」が全体でも台北でも共通の課題として 1 位と 2 位を占めている。学校や塾の経営に等しい業務を各自で分担し、家庭や育児、仕事等の中でやりくりするのは容易なことではない。幼児から中学生の親であることが前提の参加者たちは、もともと自身の自由な時間が取りにくい。その上、父親は国籍に限らず出張や海外滞在が多く、異国での育児を母親が一人で担っている家庭も少なくない。

「その他」の回答にもある「保護者間の仕事配分のアンバランス」「負担が大きいという噂」は、各地の団体が認知されてくるに伴い

臺灣大學學術期刊資料庫

そうしたマイナス面の情報も広まり、思うように入学希望者が集まらない状況が生じることもある。

しかし付け加えると、このアンケート実施後、台北では幼児クラスと小 1 クラスに入学希望者が増え、1 年後には 1 クラス 15 名前後の定員を超えてウェイティングリストに名前が連なることになった。子どもの就学を機に、より制度の整った既存団体で読み書きを学ばせたいと保護者が考えたことが一因として挙げられる。他の地区でも、在籍中の保護者たちが小さい子どもを持つ保護者たちに活動の利点を伝えて回ることにより、入学希望者数も安定してきている。

図 6-1　所属団体での課題：全体（回答者 86 名）

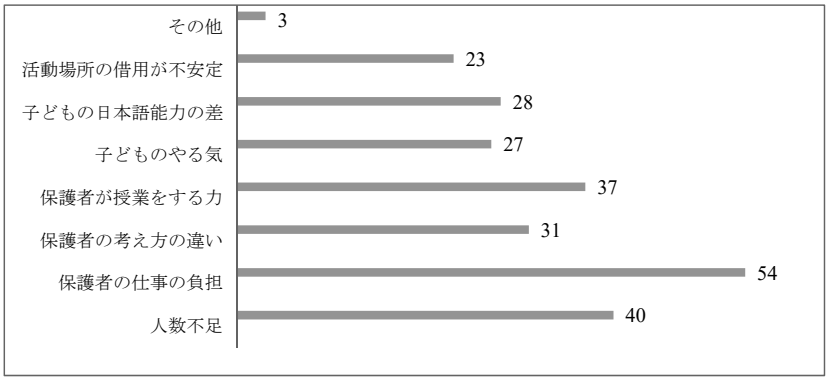
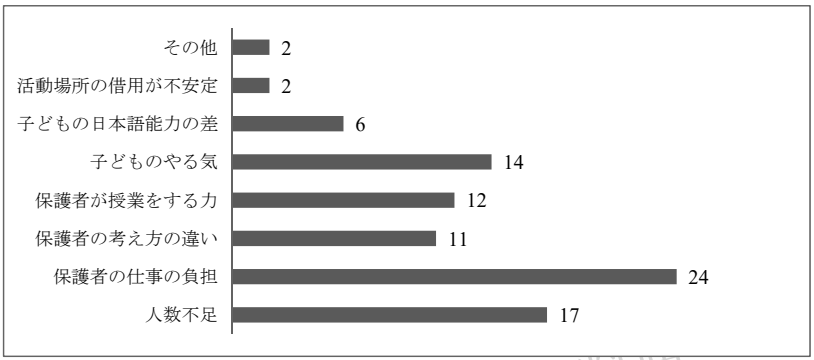


図 6-2　所属団体での課題：台北（回答者 28 名）



臺灣大學學術期刊資料庫

「保護者が授業をする力」は、全体では 37 名で 3 番目、台北では 4 番目となっている。教師の経験のない保護者自らが教壇に立つことへの不安や難しさは、誰もが感じていることだと言えよう。また、教師の経験があったとしても、成人を対象とした外国語としての日本語教育と家庭で日本語を使用している年少者への継承語としての日本語教育は、求められる授業のスキルも内容も異なるものである。

「保護者の考え方の違い」は全体では 31 名で 4 番目、台北では 12 名で 5 番目である。各団体の大部分を台日家庭が占め、台湾の学校の教育を受けており、近い将来日本に移住する予定があるわけではないという大きな背景は共通している。しかし、教科書で何を教えるか、イベントをどう位置付け実施するか、どのレベルを期待するかなど、様々な意見の摺り合わせが必要である。全員が教壇に立ったり運営の舵取りをしたりという保護者全員が当事者という中で、誰によって何を基準に最終的に意思決定がされるのかというのは、常に曖昧な状況にある。声の大きい人の意見が通ることや、反対に自分の考えがあるのに意見を言わないということは建設的ではない。そこには多くのコミュニケーションが必要とされている。

日本政府の援助対象校や外部団体との関わりの強さにおいては、台北は際立っている。そのため他の団体にはない仕事が台北にはいくつかあるが、反対にその支えにより台北では「安定」が得られている。その一つが教室借用である。「活動場所の借用が不安定」は、独自の校舎を持たないこれらの団体にとっては常に直面している死活問題である。突然教室使用料が上がったり教室が使えなくなったりした事例も、ネットワークの年次会議で報告されている。台北でも市内のあちこちの塾や会社を転々としながら活動をしてきた時期があった。しかし、後に台北日本人学校や私立高校の教室を借用する契約が外部団体の仲立ちによってできるようになったおかげで、教室の心配が当面は解消されている。

「その他」への回答は下の 3 点であった。

臺灣大學學術期刊資料庫

a. 連休が増えたことに伴うスケジュール調整[15]【台北】
b. 「保護者の負担が大きすぎる」のような噂のせいか、入学希望者が減ってきていること。塾等では得られないものが大きいことが、広く理解されていない。【台北】
c. 保護者の仕事配分のアンバランス【台中】

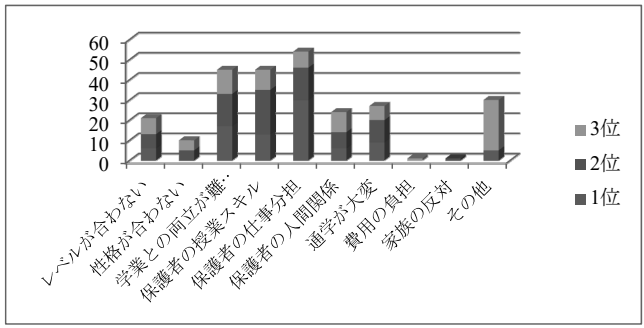
「連休が増えたことに伴うスケジュール調整」は、旧暦で正月を迎える台湾は年によって冬休み期間も異なるため、授業日の調整や確保が難しい。台北は日本政府の援助対象校に認定されていることから、年間おおむね 35 日の授業を実施するという要件を満たすために、授業スケジュールを調整しなければならなくなるのである。

（３）個人として難しいと感じていること

この質問には、難しいと感じている点について、1 位から 3 位まで順位をつけて回答する。ない場合には「その他」を選択するため、「その他」が多くなっている。

個人レベルでも団体での回答と同様に、「保護者の仕事分担」が最も多く、「保護者の授業スキル」がそれに続く。3 番目に多いのは、子どもの「学業との両立」、である。台湾では高学年になると現地校の授業時間も増え、宿題やテストの量も多くなる。

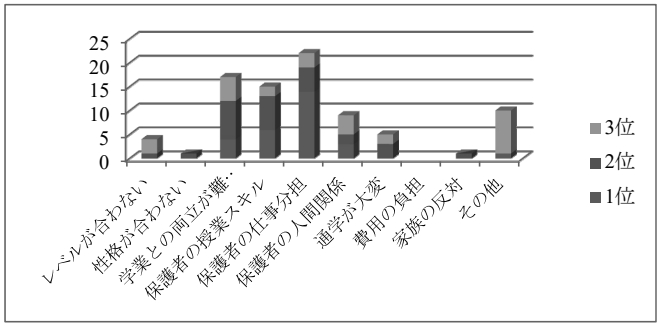
図 7-1 個人として難しいと感じていること：全体（回答者 86 名）



[15] 近年の台湾の政策により、祝日が火曜日と木曜日にあたる場合には、その間の月曜日と金曜日も休みにして四連休にする。そして、休みとなった月曜日と金曜日の授業や仕事を連休の前後の土曜日に行う。土曜日を授業日としているこれらの団体はその日に授業ができなくなる。

臺灣大學學術期刊資料庫

図 7-2　個人として難しいと感じていること：台北（回答者 28 名）



全体の回答での 4 番目「通学が大変」は、台北では少ない。台北はバスや MRT 等の公共交通機関が発達している上、交通至便な場所にある私立高校の教室を借用しているためである。

その他の回答は以下の通りである。

a. 学んだ日本語を更に発展継続させて、日本語のレベルを高めていくこと。【台北】

b. 違う学年の保護者と交流する機会がほしい。【台北】

c. 行事の負担が大きい。【台北】

d. 授業中には会議等が入り子どもの授業の様子が見られない。【台北】

e. 生徒が増えないため、クラスに仲の良い同性の友達ができない。【台北】

f. 教材が不足している。【桃園】

g. とにかく人数が少ない。いつ廃校になってもおかしくない。【新竹】

h. 子どもが体調不良の時、休みづらい。【台中】

i. 保護者の熱意の差。【台南】

j. 遊びだけでは日本語は身につかないと思う。【台南】

k. 男性の保護者が少ない。【高雄】

h.の「子どもが体調不良の時に休みづらい」というのは、多くの

臺灣大學學術期刊資料庫

保護者が感じていることで、こうした運営での苦しい点の一つである。学校や塾であれば子どもを休ませればよいが、保護者が担当している仕事を急に休むことが難しかったり遠慮したりして、子どもを欠席させて保護者のみが出席するという状況になることがある。回答の中で「仕事分担」が多いのは、実際の仕事以上にこうしたプレッシャーも反映しているように思われる。

（4）所属団体の活動をよりよくするために改善できること

自由記述で答えるこの質問への回答は、保護者の所属団体への運営に対する問題意識をより明確に反映していると考えられる。各回答の要点を分類すると、図 8 のようになる。下の棒が台湾全体、上の棒が台北の回答である。

その中で多かった【意識改革】【簡素化】【外部教師】【交流・信頼】【授業スキルの向上】に分類される回答とその他について、極力原文を残しつつ重複する内容をまとめたものが表 3 である。「なし」を除くと、最も多いのは台湾全体では「意識改革」、台北では「（組織や連絡の）簡素化」となっている。台北での簡素化については、前述した台北の特徴によるものが大きい。台北は人数も多く活動歴も長い。そして他団体との最大の違いは、外部の日本関連団体に支えられているという点である。それ故に、他団体にはない業務もある。しかし、100 人近い児童生徒数を擁する団体にとって、活動の安定は何よりも重要である。一保護者には不要に見えても実際には組織の繋がりが鍵になることは多々ある。その理解をつなげていくために、内外の運営基盤の確立に尽力した初期の運営委員長経験者が現在も運営のサポートに携わっている。

授業以外に行われるイベントや文集の刊行も、それをなくして簡素化したほうがいいという意見もあるが、一方では準備は大変でも子どもたちには貴重な思い出になるし、保護者にも子どもたちの成長を実感する機会にもなるので継続したいという意見も多い。

台湾全体で最も多かったのは「意識改革」である。しかし興味深いのは、その「意識」が表 4 の欄の上部「もっと真剣に」と下部「も

臺灣大學學術期刊資料庫

っと気楽に」というように性質が異なっていることである。

「簡素化」「意識改革」の意見からわかるように、必ず裏表の考えができるし何が正解とは決められない。

3 番目に多いのは「授業を保護者ではなく外部の教師に依頼する」で、これは台北でも常に議論に上る意見である。その理由は、後の「授業のスキル」にも繋がるが、保護者自身が授業をすることに対する不安によるものが大きいと思われる。低学年クラスでは子どもたちを如何に学習に向かわせるかに大変な労力を費やし、高学年では教える内容が保護者にとっても高度になるというように、子どもの年齢に応じて異なる難しさがある。また、わが子のクラスで教えるため、毎年保護者も新しい単元の授業をすることになる。次の授業へ活かせないという点でも負担感は大きい。保護者が授業をする負担を減らせば、入学者は増えるという意見もある。

その一方で、（1）で述べたように、「保護者の経験値が上がる」「保護者も成長できる」という肯定的意見もある。こうした保護者の熱意と努力故に、外部の支援が受けられている。台北日本人学校の教員による授業が年に複数回受けることができるのも、「子どものため」はもとより、「保護者の参考になるように」という意味も強い。

外部の教師を雇用した場合には、理想的な教師を安定して雇用できるのかという問題もある。また、継承語教育の分野における教師の資質やカリキュラムについても、議論の途中である（中島他 2014）。

4 番目に多いのが、「交流・信頼」である。学校や塾任せではなく、自分たちの力での教育実践することには常に不安がついてくるものである。IT の進化とともに、オンラインでの交流は便利さを増している。しかしそういう時代だからこそ、子どもも保護者も実際に顔が見える交流をして信頼関係を築くことが重要である。そのための交流会や勉強会も、年に 1 度の割合で合同で行われている。

「授業スキルの向上」が上の 4 つに続いて多いのは、前向きな心構えの表れであろうし、そのためには外部の支援が得られている現

臺灣大學學術期刊資料庫

在の体制を維持していくことが望ましい。

図 8　活動をよりよくするために改善できること

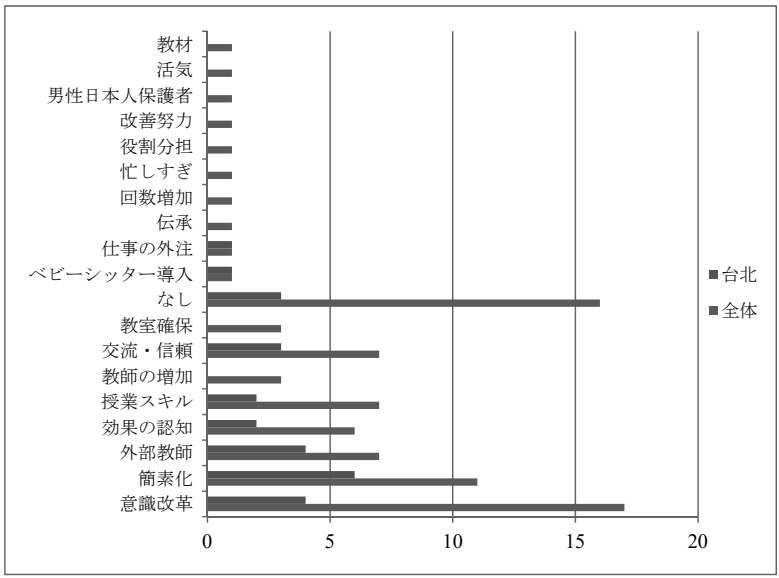


表 3　改善案[16]

分類	都市
① 意識改革	
・子どもの学習に親も積極的に取り組む。	桃
・集中して真剣に取り組むようにすると、楽しく充実する、	竹・雄
・家庭学習も強化する。高学年になると、語彙や表現力の差を感じる。	北
・日本人学校の先生の授業は、保護者も当事者意識を持って参観する。	北
・補習校運営に積極的に参加すること。	竹
・保護者のやる気・熱意の差が活動に影響しているので、意識を向上させる。	南
・補習校として、目的や方向性をはっきりさせたほうがいい。各家庭での考え方・環境・子供の日本語能力などに違いや差があるのは理解できるが、協調性を大切にしたい。	中
・日本語を使用することを徹底させる。	桃・竹・

[16] 北＝台北、桃＝桃園、竹＝新竹、中＝台中、南＝台南、雄＝高雄の保護者の回答を表す。太字の強調は筆者による。

臺灣大學學術期刊資料庫

	南
・クラスの仕事は無理をせず、自分のできる範囲で頑張る。	北
・人数が増えると平等であることが難しくなる。平等を求めるのではなく、互いに補い合う気持ちを大切にする。	北
・もう少し気楽に授業をすること。みんなが真面目すぎて自分が授業をする時にプレッシャーを感じる。	桃
・極端に頑張るというよりは、各自が持続可能な範囲で無理なく協力し合える関係・仕組みを作る。	竹
・楽しい雰囲気を全体に漂わすこと。そのために必ず笑顔であいさつを交わす、それぞれの家庭環境を思いやる、その上で授業内容や行事内容が全体のニーズに合っているかの話し合いのベースにのせる。笑顔でできなければどんな行事も意味がないし、子どもたちが楽しくなれない。まず「自分から楽しむこと」を心がけたい。	中
② 簡素化	
・連絡・運営の煩雑さを減らす。メールのやりとりを減らす。	北
・2年連続で委員長、副委員長を務めた方が少しは負担が減るのではないか。しかし2年となると尻込みしてしまう可能性も大かなと。	北
・親の負担に差があると感じるため、作業の簡略化を図る。	北
・イベントや出版物を減らす。	北・竹
・自分の子のクラスで授業をすると、常に新しい単元を教えることになり、準備に時間がかかる。単元ごとの担当を決めるのはどうか。	北
・もっと簡略化するべき。親が教務ができない子供は参加できない状況を改善できれば。第一子が就学年齢に達しているのに、下の子が小さ過ぎて参加できないという状況が多く見受けられるのはとても残念なことだ。会費を上げるなどで、そうした子どもたちも参加できないか。いたずらに生徒を増やしたいのではなく、学ぶ機会を広げたい。	中
③ 外部教師	
・保護者ではなく、運営費を高くしてもプロの先生/日本語を教えられる資格を持った人に依頼できると、保護者の負担が減り/授業の質も向上し参加者も増えると思う。	北・竹・中より複数
④ 交流・信頼	
・学年を超えた自由な交流の機会を作ると、潤滑なコミュニケーションに繋がるのではないか。メールの手間も省けるかもしれない。	北
・保護者の負担を軽減できるよう、皆で考えアイディアがあれば提案でき実行できる環境作りをする。	北
・個々のメンバーの声が聞こえるような風通しのいい環境を作る。運営サイドは保護者の気持ちに気を配り対応する。	中
⑤ 授業スキルの向上	
・勉強会や他の方の授業を見る機会を増やしたい。	北
・日本人学校の先生方との交流や日本人学校授業参観の機会を活用したい。	桃
・保護者への教え方講座/研修があるといい。	北桃竹中

臺灣大學學術期刊資料庫

その他	
・就学前の幼児を連れてこなければならない家庭があれば、その人たちのグループを作り、ベビーシッター当番制にしてみたらどうか。	北
・単純な日本語学習の場と認識される限り、保護者の役割の重さとあわせて考えると入学者は減るばかりのように思う。ここの良さをアピールできること、親子でやる気が出て楽しくできること、そしてやる気＝負担にならないことを常に考えなければと思う。が、相反することも多く、解決策がなかなか簡単には見つけられないところが課題。	北
・改善策ではなく、問題提起だけで申し訳ないのですが、初期の頃は授業をするだけで精一杯だったが授業校は年月を経て様々な行事をしたり、多くの支援を受けられるようになったことで、子どもたちに多くの経験をさせることができ、親は嬉しい。ただ、それらを維持するために保護者には更に多くの負担がかかるようになった。しかし、負担だからと言って、初期の頃に戻ることはできないし、戻りたいとは思わない。それではどのように改善すれば良いのだろうか？答えはとても難しい。	北
・継承語教育に適した教科書やワークがあると負担も減るだろう。	北
・人数が増えれば保護者の負担も軽くなるし仲間もできるが、広告も出しているのになかなか増えない。	北
・引き続き宣伝をする。毎年運営の役員を決めるのに難航するが、ある程度のマニュアルや先輩方のフォローがあることを伝える	北
・メンバーの増強（まだまだ知らない人が多いと思うので。）	桃
・経験を積んで、その都度対応していくしかない。	中
・保護者の負担が減らせるよう、係り分担制を導入した。うまくいってくれることと祈っている。	中
・教室（場所）が安定して確保できれば、クラスに分かれて年齢に合ったことができるのではないかと思う。	南
・とにかく子供が忙しいのと、正直子供たちがあまり日本語学習に興味がないのでただ通ってるだけで身についてるかどうかは疑問です。	雄
・男性保護者が少ないので、もっと活動をアピールしていく。	雄

（二）年次会議での議論

台湾継承日本語ネットワークでは､毎年5月末或いは6月上旬に、各地の代表と日本関係団体の来賓を迎えて年次会議を開催している。

実際に顔を合わせて行われる議論は非常に活発で、いつも時間が足りない中で閉会する。

その会議において過去5年間で出された質問や相談からは、各団体のその時の問題点を垣間見ることができる（表4）。役割分担、

臺灣大學學術期刊資料庫

運営幹部の引継ぎ、授業の内容については、複数回にわたって議論に上っている。そこでの質問（相談）とそれに対する他団体のコメントの一部を表 5 に示す[17]。

表 4　年次会議で討論された話題

年	話題	話題提供
2013 年	日本人父、台湾人母家庭の役割分担について	新竹
	日本語の速読教材について	台中
	日本の文化背景を理解させる方法について	台中
2014 年	「国語」の教科書で何を教えるか	台中
	母語話者ではない保護者の役割分担	台中
2015 年	運営幹部の後継者決めや引継ぎの工夫	台北
	校舎・教室の借用について気をつけること	新竹
	寄付金の扱い	新竹
	国語の教科書の進度	台中
	入学者やクラス分けの基準	台中
	クラスの最低人数	台中
	校外活動の移動手段	台南
2016 年	発表会の会場探しとリハーサル	新竹
	運営幹部の仕事分担と規則作り	台中
	仲間を増やす方法	台中
	教務の仕事範囲	台中
	イベントは誰がどのように準備をするのか	台中
	文集作成のルールや仕事の分担	
2017 年	一緒に活動する仲間を増やす方法	台南

表 5　年次会議における質問とコメント

質問（相談）	コメント
１．役割分担	
父親が日本人で母親が台湾人の家庭の場合、仕事で忙しい父親が活動に関われないと保護者が分担できる仕事の量や範囲が限定されてしまう。	イベントや安全など台湾の人の力が発揮できる仕事を担当することで極力バランスを取ることにしている
２．運営幹部（役員）の引継ぎ	
これまで組織を牽引してきた保護者が数年内には抜けることになっている。今後どのように引き継いでいくか。	台北では小 5 クラスの保護者が運営委員長[18]を担当する。組織の理解や仕事の引継ぎには時間がかかるため、その候補者は小 3、小 4 クラスで運営副委

[17] 年次会議での討論内容及び議事録を筆者の研究で使用することは、毎年の年次会議で承認されている。
[18] 他地区では「代表」と呼ばれている。

臺灣大學學術期刊資料庫

	員長を務める。これからその役を控えた保護者にはプレッシャーが大きいが、実際に担当するとその準備期間の必要性が実感できる。後継者を 1,2 年前に決めて一緒に仕事をしながら引継ぎをする方法は、桃園と新竹でも行われている。
３．授業内容	
国語の教科書を使用する授業では、物語文等の作品を味わうこと、スピーチや論理的な文章の作成等のスキル養成のどちらを重視するのか。それをどう決めたらいいのか。	どちらが正しいとは言えないのではないか。保護者同士の話し合いにより、それぞれの目的や方針に合わせて摺り合わせをしていくしかない。
４．メンバーを増やす方法	
「保護者の負担が大きい」という噂が広がって、対象年齢の子どもはいるはずなのに、参加希望者が思うように集まらない。	卒業生のその後の活躍を知ってもらう。それらは台北日本語授業校の機関誌『21 世紀』[19]や「居留問題を考える会」[20]の会報や座談会で知ることができる。「こうしたら必ずこうなる」という方法はないが、複数の言語文化背景を持つ卒業生の姿にわが子の数年後のイメージを重ねるのは、励みになるのではないか。

活動が長くなり、「お互い様」で助け合えた初期の状態から規則の整備や役割分担が各地で進められているのも、近年の傾向である。

（三）参与観察から

授業や会議、イベント等への参与観察[21]から、保護者たちの熱意が伝わってくる。卒業生たちの声からも、ここでの経験が貴重な経験となっていることがわかる。

しかし、気をつけたい点がある。保護者が子どもに伝えたいと思うことが多く欲張りすぎてしまうこと、目指すものが曖昧であったりすることである。

[19] 毎年 4 月と 10 月に発行し、台北内部と各地の団体及び外部支援団体に送付されている。

[20] 湾各地で座談会の開催、会報の発行を行い、主に国際結婚家庭が台湾で生活する上での法律、教育面でのサポートを行っている。会員は全国に約 400 名。「台湾継承日本語ネットワーク」発足に際しても、同会各地役員の繋がりが大きな貢献をしている。https://sites.google.com/site/kyorumondai/home

[21] 筆者の台北日本語授業校の参与観察及びその研究への使用については、毎年 4 月末に行われる保護者総会で承認されている。

臺灣大學學術期刊資料庫

例えば、「日本語を身につけさせたい」「日本の文化を伝えたい」「日本のような教育を受けさせたい」というのは保護者に共通する思いであろう。しかし、その言葉が指す具体的な意味は人によって異なっている。或いはただ漠然とした理想だったりする。日本語でどんなことができるようになってほしいのか、「日本の文化」「日本の教育」とはどんなことなのか等、自らの考えを伝え合い実践していけるような保護者同士のコミュニケーションが必要である。

また、「両言語とも年齢相応のレベル」という保護者の「理想」についても再考を促したい。台湾の学校に通う子どもが中国語の力が伸びるのは当然であり理想である。小さい時には日本語であった我が子の口から出る言葉がどんどん中国語になっていくことに焦りを感じる保護者もいる。「日本語の力が低下した」のではなく、「中国語が伸びた」のである。子どもが現地校で学んでいるのであれば、中国語を柱とした学習に日本語でもできることを増やしていくのが現実的であろう。また、「両言語とも年齢相応のレベル」を目指して、週に 1 回約 2 時間という限られた時間に日本の教科書のあらゆる内容を詰め込もうとして、学習目標が見えなくなってしまうこともある。「年齢相応」という理想に対する空回りが気持ちの負担を招いていることもある。

継承語としての日本語教育事情も把握した上で、自分たちで授業内容や方法を取捨選択し話し合える土台を作ることが重要である。

四、考察

（一）保護者の負担とは

保護者の質問紙への回答や参与観察から見える「負担」は、図 9 のように表すことができる。実線の四角は実際の仕事、点線の四角は気持ちの上での要因である。

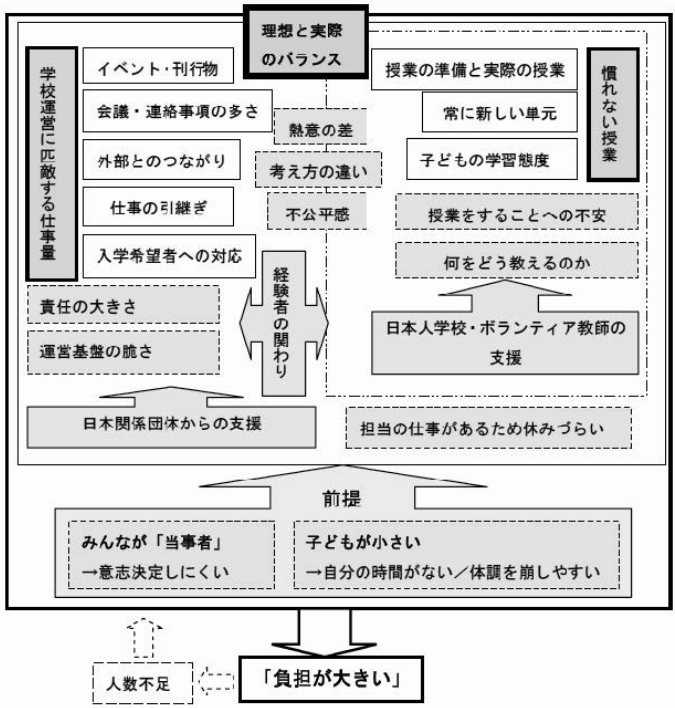
運営面では、学校運営に匹敵する仕事を保護者たち自身でこなしていくのは容易なことではない。更にそれは常に後の人に引き継がれていく動的なものである。授業面では、シラバスや教材、授業の

臺灣大學學術期刊資料庫

技術について十分な理解や検討の時間がないまま過ぎていく。自分の授業への自身のなさは残ったままである。授業日には保護者自身にも担当の仕事があるため、子どもが体調不良の時も保護者は休むわけにはいかないこともある。そうした負担が噂となって、新しいメンバーが増えないという循環が生じてくる。

また、参与観察から見えることとして、授業で扱う内容の取捨選択と意思決定の方法に関する負担もある。保護者の間で意見が異なる場合、最終的に誰が何の基準で結論を出すのか、それが明確ではない。こうした不安や曖昧さが、「誰もが当事者」である運営の難しいところであり、実際の仕事以上の重荷になっていることもある。

図 9　「負担」に関わる要因



臺灣大學學術期刊資料庫

どの要因もこうした自主運営においては容易に解決できるものではないが、保護者自身が考え、そして円滑にコミュニケーションが取れるようにすることが大切である。また、保護者たちが自分たちができることの取捨選択ができるように、継承語としての日本語教育情報の提供を、筆者も行っていきたいと考えている。

（二）国語の教科書を使うこと

世界の継承語教育の現場では日本の国語教育以外のカリキュラムが提唱･実践されている中で､台湾では国語教科書を使用している。

固定した教師がいるわけではなく、そして誰もがやがて卒業していく状況の中で、自分たちでカリキュラムや教材を開発する余裕がない、という消極的な理由もある。

その一方で、現地校では教師主導型の授業が主流で、漢字の知識が豊富な台湾で教育を受ける子どもたち、そして子どもに身につけさせたいことを自分たちの力で伝えようとする保護者の意向、日本人学校から支援を受ける便宜上の理由を鑑みると、国語の教科書を使うという選択も否定するものではないと思われる。

（三）人との触れ合いを通して

アンケートによれば、活動を通して得られることは、日本語習得の他に、子どもも保護者も「仲間」であり「情報」であった。毎週定期的に親子が集まり自らの力で活動を実践しているからこそ得られるものである。

また、継承語は、社会生活ではなく主に家庭生活で使われる。保護者の願う「年齢相応の日本語」には、ウチとソトやフォーマルインフォーマルの使い分け、敬語の習得も含まれる。親子関係の中では使用する機会は少ないが、こうした団体での学習がフォーマルな場となること、また活動で大人たちと接することで、それらを習得し実践することもできるのである。

更には自分の親以外の日本人や日本関係団体の関係者との触れ合いを通して、台湾と日本の両方の社会に接点があるという自覚を持つこともできる。

臺灣大學學術期刊資料庫

五、日本語継承活動の意義と今後の課題

（一）活動の意義

保護者の自主運営という形での継承語としての日本語教育活動は、一つの学校を運営するような業務を保護者自身が無償で行うため、必然的に「負担」が伴うものである。しかし、それでも保護者たちはその良さを実感し、そして広めて継続させようと努力している。

わが子に日本語を継承する方法は様々であるし、また継承しない選択もある。ただ、卒業生の親子の声からわかることは、楽ではなかったが、ここで学んだ時間はわが子と向き合い仲間と出会う貴重な時間であったということである。

三代（2013）は、日本語教育における「場」を①教室の社会的文脈化、②言語学習観の共構築、③「話す権利」の保障としている。保護者が自分たちの考える理想の環境を創り、日本語で学習する「場」を通して社会的文脈の中で親も子もお互いが育てあっていくことに、この活動の意義があるのではないかと考える。

北米を中心に進められている継承語としての日本語教育のカリキュラムの導入を検討する余地はあるが、台湾で行われている活動は、保護者が嘗て辿ってきた自分の言葉の世界を子どもに疑似体験させたいと願い、それを自ら実践しているという色が濃い。それも継承語としての日本語教育の一つの形ではないだろうか。

また、保護者たちが自分で考えそれを伝え合い行動するというのは、まさに保護者がわが子たちに身につけてほしいと考えるスキルではないだろうか。それを保護者自らが実践しているというのは意義深いことであるし、それを通して子どもはその価値を理解していくであろう。

（二）今後の課題

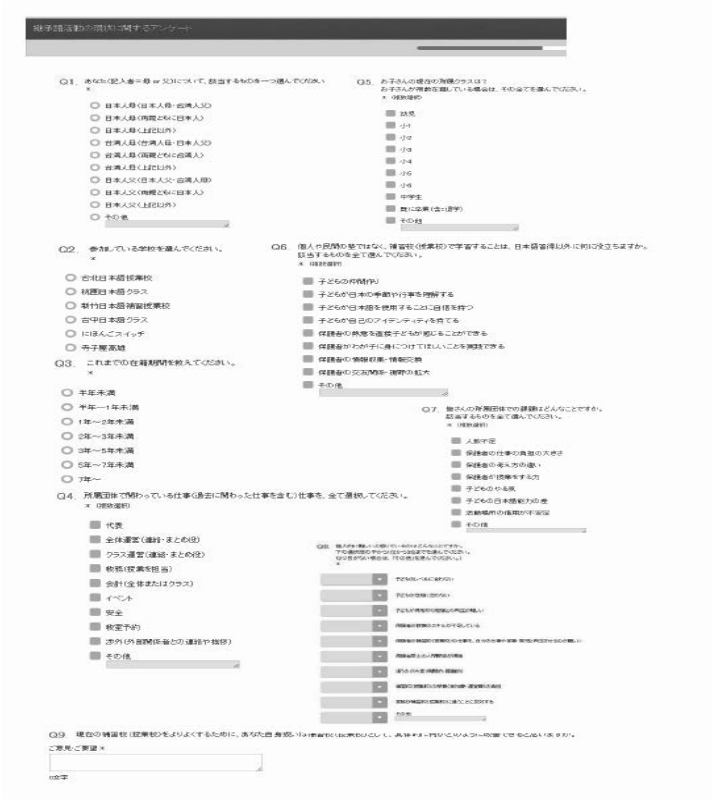
まず、アンケート調査の方法である。アンケートの結果を見ると、「保護者の負担ありき」の項目が連なっている。よりオープンな設問にすれば、異なる視点を導き出すことができたと思われる。

臺灣大學學術期刊資料庫

次に、今後の研究として、これらの団体で学んだ卒業生にとっての継承語について考察していきたい。本研究では、保護者から聞かれる「負担」の実体を探ることを目的としていたため、マイナス面が強調されることになった。しかしそれ以上に得られるものがあるからこそ、活動は続けられている。それが当事者である子どもたちにはどのような意義があるのか、今後はこの点に注目したい。

これらの結果が台湾での継承語教育の参考になれば幸いである。

【資料】https://questant.jp/q/3VN24659



臺灣大學學術期刊資料庫

【参考文献】

カルダー淑子(2011)「アメリカの補習校における新世代の母語教育」江原裕美編著『国際移動と教育　東アジアと欧米諸国の国際移民をめぐる現状と課題』pp.319-329、東京：明石書店

佐藤郡衛・片岡裕子編著（2008)『アメリカで育つ日本の子どもたち－バイリンガルの光と影－』237 ページ，明石書店，東京

ダグラス昌子(2006)「年少者のための継承日本語教育におけるプロジェクトアプローチを使った合同授業のデザイン」AATJ, JHL Journal, Vol. 1.
http://www.aatj.org/resources/sig/heritage/ejournal/vol1.pdf

中島和子、カルダー淑子、佐々木倫子、清田淳子、大山全代、湯川笑子（2014)「母語・継承語・バイリンガル教育の軌跡と展望」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』第 10 号、p.1-45、母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会
https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/57933/mhb_10_001.pdf

中野友子（2017)「多様性に対応したブルックリン日本語学園での継承語教育の実践」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』第 13 号、p.33-61、母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会

服部美貴(2015)『台湾に生まれ育つ台日国際児のバイリンガリズム』台北：台湾大学出版中心

花井理香（2016)『国際結婚家庭における言語選択要因　韓日・日韓国際結婚家庭の言語継承を中心として』京都：ナカニシヤ出版

深澤伸子（2013)「複言語・複文化の子どもの成長を支える教育実践－親が創るタイの活動事例から」川上郁雄編著『「移動する子ども」という記憶と力　ことばとアイデンティティ』pp.347-372、東京：くろしお出版

三代純平（2011)「『場』としての日本語教室の意味」細川英雄編『言語教育とアイデンティティ』、p.75-97、横浜：春風社

臺灣大學學術期刊資料庫